



カントウータ

Cantuta

No. 43



Panthera Onca: Reserva Serere, Madidi Travel 写真提供

1. 2018年8月：ボリビア回顧旅日記（最終回）渡邊 英樹
2. 日本人が見たりベラルタ ―その5―大島 正裕
3. 第14回日本―ボリビア国際医学・消化器シンポジウム ...森下 鉄夫
4. コロナ禍における国際協力・JICA事業の新たな取組 小原 学
5. ボリビアの近況（新型コロナウイルス 他） 杉浦 篤

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. 2018年8月： ボリビア回顧旅日記（最終回）

一般社団法人日本ボリビア協会相談役
元海外移住事業団ボリビア駐在
渡邊 英樹

8月15日

今日は、この旅のもう一つの目的であったコチャバンバ市の野原昭子さんが主宰する「CAPEDIS」(LA CASA DE ACOGIDA PARA PERSONAS CON DISCAPACIADO)が運営する障害を持った孤児達の「聖マルティンの家」訪問である。

もう12～3年前のことになるが、東京・高円寺のカトリック教会で野原昭子さんにお会いしていろいろとお話を聞くことができた。野原さんは、ボリビアの教会でマドレ(シスター)として、働いていた時に道ばたに捨てられていた障害のある孤児を、見るに見かねて教会に連れて帰ったとのこと。ところが、教会は規則で孤児を置き続けることはできなかったという。

そこで野原さんは、マドレの職を辞し、教会を辞めて単身自力でこうした孤児達の施設の立ち上げを決心したという。ご承知のように教会の聖職者は厚く保護されて安泰な生活が保障されている。まず、それをなげうって徒手から施設の建設に挑んだ勇気に驚かされた。

しかし、このとき野原さんは大変な苦境に立たされていた。その経緯については、は野原さんご自身の手記を引用しよう。



写真 1-1 チャリティでは寄付の相手方の実態を理解してもらうことが大切なので、野原昭子さんにはこれまで4回会員との交流を深めてもらっている。相模湖C.Cでスタート前に活動状況を説明する野原さん(2009年)

『2年ほど前、私は土地を買い、日本に建築資金集めに帰国し多くの方々に協力していただきました。が、その土地が建築禁止地区であることが後で分かり、まず、買った土地の近くの借家に引っ越して、そこで必要な改造をしました。役所の人は土地を測りにきた時には施設を建てる事を知っており、しかも設計を担当してくれたのは、前市長であったにもかかわらず何も言わずに設計をし、建設許可をもらいに行ったときに許可は出せないと初めて言われた。おそらく、金を取るのが目的ではないかと、、、。

その時にはすでに、10万個の土レンガも作り移動の段階でした。その土レンガは2年間教会裏の広場で雨に打たれ、これ以上放置できなくなりましたので今年の雨期に入る前に、買った土地の周りを塀とブタ、ニワトリ、アヒル、モルモット、ウサギなど(すべて食用)の家畜小屋に使いました。それは、食用のために飼っていたモルモットやウサギなど15匹も野犬に食べられてしまったか

らです。又、その土地の管理と野菜、家畜の世話に一家を雇い、彼等の為の家と、倉庫を作るなど急遽計画を変更しました。その他手術など思わぬ出費が重なり、2年前に戴いたお金はこのような方法で使ってしまった事をお詫びしておかなければなりません。これらについて、必要な方はエルピス会に会計年間報告を願ってくださればと思います。』

エルピス会とは野原昭子さんの実姉が主宰する「聖マルティンの家」を支援する福岡県のNPO法人で、支援金の使途など会計報告を任されています。野原さんはあまりの出来事に心痛のあまり病に倒れ、食料運搬等に必要であったカミオネッタ(軽トラック)もお金のために売ってしまわれたとのことでした。

私はこのようなお話を聞き、微力ながら協力を約束しました。幸い、私はコロニアオキナワの周辺の貧しいボリビア人の子らを対象とする育英資金作りに協力するための「ボリビアンチャリティゴルフクラブ」立ち上げていて、オリオンビール株式会社等々沖縄県の沢山の企業の協力を得て、年1回120名以上のご参加をいただき、コロニア支援の大会を開催していました。

幸いに育英資金が目標額の1,000万円に達する見込みが立ったので、後を沖縄ボリビア協会に託し、私の活動を「聖マルティンの家」支援に振り向けることにしました。『北国の春』の作詞者いではく氏、金山仁志郎茨城キリスト教学園理事長、河治弘ハミーズシステム社長らのご賛同をいただき、さらには強力な支援者としての荻谷不

二男氏率いる設備工事の職人さん達と実に多彩なユニークな集団となり今日に至っています。



写真1-2. 2005年から沖縄でコロニア支援ゴルフ大会を開催し、御礼の挨拶をする筆者

今回は、雨期の大雨により近くの川が氾濫、あわや「聖マルティンの家」も壊滅の恐れがありましたが、奇跡的に壁一つで難を逃れました。心配して我々は急遽義援金を集めて送りましたが、今後の事を心配しての訪問でした。



写真1-3 「聖マルティンの家」左の道路に濁流の痕跡の石が積まれていた。前方の雪を頂く山に降った雨が洪水となってこの地域を襲うことが近年恒例化している。
2018年筆者撮影



写真1-4 直ぐ近くを流れる川が土石流であふれた怖さを十分想像させられる光景であった。川の浚渫が十分に為されることを期待したい。2018年撮影



写真1-5 野原昭子さんが騙されて買わされた5000㎡の土地は農場として立派に機能している。支配人の庄司茂さんと。庄司さんは、道路工事でボリビアにやって来て、ボリビア女性と結婚、コチャバンバに永住している。



写真1-7及び1-8 皆、それぞれの特技を活かして自立を目指して頑張っている。彼女専用のキッチン。ゼリーを作り市の中心街の売店に卸している。2018年筆者撮影



写真1-6 歓迎のお茶会を開いていただいた。ビーズで作ったブレスレットを我々親娘にプレゼントしていただき。時々地球の反対側の皆さんから日本にいるチャリティゴルフのメンバーの健康と幸せを祈ってもらっていることを知り感動する。(2018年撮影)

野原さん達の辛抱強い自立への支援努力を紹介したい。マリア・ルスは日本で絵の個展を開いたこともあるが、ここに来た時には四肢が不自由で一人で食事が出来ずに、食べさせてもらっていたという。それを訓練でフォークとスプーンで食べられるようになるまでには、ある時は彼女が一人で食べ始めるまで、全員が食事を始めずに待ったこともあったという。そして、絵筆を持たせたら絵の才能が開花したという。



写真 1-9 売店の店番をしながら絵を描くマリア・ルスと再会。絵の才能が開花した。2018 年撮影



写真 1-10 マリア・ルスの作品



写真 1-11 幼い時に母親に火の中に投げ込まれて大火傷を負ったマルガリータとの再会。中心街にある教会の一隅の「聖マルティンの家」直営の売店で刺繍の手芸品を制作していた。見違えるような明るさに感動した。

よく、皆さんから長く続ける秘訣は？と聞かれる。応えは簡単である。皆さん誰もが慈善したい気持ちを持っているということである。

その心を無にしないために、お預かりしたチャリティ金は一銭も欠かすことなく、相手にお届けすることである。自分の活動や連絡通信費等々の諸経費は、ボランティア活動の一環として自らが負担すればいいだけのことである。

自分の出したお金が全額はっきりとした相手に届くという安心感こそが大切で、そこから信頼感が生まれる。ご褒美は何かと言えば、かけがえのない素晴らしい友達とコミュニティを得られたことである。小規模だから出来ることではあるが、それぞれの身の丈にあった沢山のチャリティ団体がこれからも生まれて欲しいと願っています。

(おわり)



写真 1-12 チャリティゴルフのスタート前、最前列左より、作詞家いではく氏、深沢樹代会計役、マルガリータさん、野原昭子さん、筆者。右端河治弘ハミーズシステム社長

2. 日本人が見たリベラルタ

ーその5ー

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員

大島正裕

【リベラルタで活躍した日本人列伝】

I 下瀬甚吉 (1882または1885～1970)

1. ペルー来訪から、リベラルタ日本人会で活躍するに至るまで

リベラルタで活躍した日本人列伝を書いてみようと思い立ち、これまで収集した資料をひっくり返してみると、下瀬甚吉という名前が頻繁に出てくる。リベラルタの日本人社会の興隆に指導力を発揮した人物だが、リベラルタでは、その息子の詩人ペドロ・シモセ (1940年～) の父として有名かもしれない。

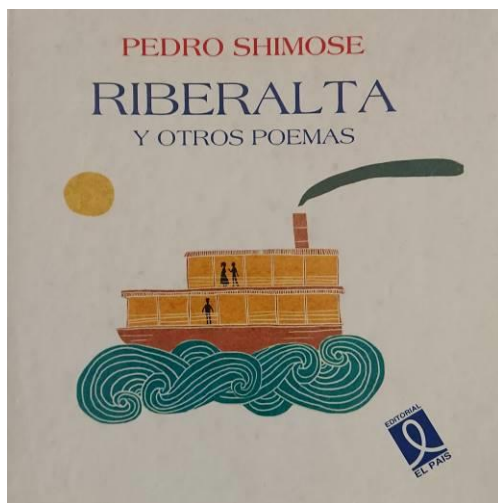
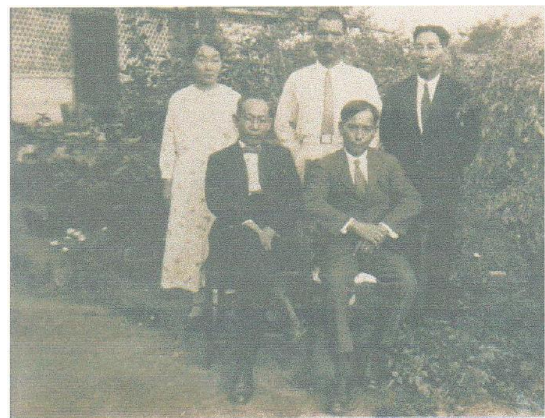


写真2-1 ペドロの詩集『リベラルタとその他の詩』

詩人ペドロ・シモセ (Pedro Shimose) は、知る人ぞ知るスペイン語世界で活躍する日系の詩人であり、その代表作に『リベラルタとその他の詩 (Riberalta y otros poemas) 』 (1996年) という作品がある。私はこの本をラパスで馴

染みにしている本屋で購入し、自分でも翻訳してみたのだが、詩というのは翻訳にもある種のセンスが必要だ。

思い悩んでいたところ、灯台下暗しで日本詩人協会の会長や日本ボリビア協会の理事をされ、昨年12月に逝去された詩人の細野豊氏が、『カントウータ』の第1号からシモセに注目し、同人の詩を詩人としての感性から美しく翻訳されていた。『カントウータ』第5号には、細野氏が連載していた「ボリビアで活躍する日系人ーその1の5ーペドロ・シモセの両親と弟妹たち」というエッセイもあり、その中で、『リベラルタとその他の詩』の巻頭詩「リベラルタ」という小品を訳されている。詳細は、『カントウータ』第5号の細野氏の翻訳をご覧ください。そこにはペドロのアイデンティティや熱帯雨林リベラルタへのなんともいえない繊細な印象が伝わってくる。私にとってありがたいのはこの細野氏のエッセイに晩年の下瀬甚吉の写真が掲載されていたことである。細身で温和な印象を感じさせる人物である。



Miembros de la Sociedad Japonesa de Riberalta.
De izquierda a derecha - Parados : Sra. Maria de Shimose, Sr. Ernesto Ishi y Sr. Juan Shiosaki. - Sentados : Sr. Pablo Shimose y Sr. Chuji Shigekuni. Riberalta, 1937.

写真2-1 前列左端が、下瀬甚吉。グアヤラメルン在住のマルタ・シゲクニ氏所蔵

ペドロ・シモセには、「OTOSAN (1882 - 1970)」という詩もある（これも細野氏が『カントウータ』第2号で翻訳されているので参照いただきたい）。また『日本人移住100周年誌 ボリビアに生きる』にペドロは「歴史を持たぬ人々の物語」という文章を寄せ、「私の父は、死ぬまで挫折の中に苦悩を秘めてリベラルタで生き続けた。日系ボリビア人たちは当時の政治家たちに〔日本人たちが移住初期に利益を共有する組織として作った〕農業協同組合を潰さないよう懇願した。〔中略〕しかし耳を貸すものは誰一人としていなかった。ずっと後になって父は私にこう言ったのである。息子よ、おまえは許すことを学ばなければならないよ。なぜならボリビアという国は那样的な国なのだから。」¹。

このような父、甚吉のことを語る息子ペドロの語り口は敬意に満ちており、息子が描く父甚吉は、慎み深く粘り強く、かつ艱難を重ねた明治人の威厳を感じさせる人物である。

ところで、かくも息子に敬愛された下瀬甚吉の肉声については、前号紹介した『日本人ボリヴィア移住史』の中で触れることができる。私の恩師加茂雄三先生が行った下瀬甚吉への最晩年のインタビュー及びその略歴によると²、下瀬は明治18年（1885年）に山口県吉敷郡大道村（現在の山口県防府市）に生まれ、明治42年（1909年）、森岡商会の第5回ペルー移民として、厳島丸³にてペルーに来訪し、当初、チャンチャマヨ（Chanchama

yo）耕地で就労し、その後、耕地との契約終了後に「福岡県のツタマキ君という何でも〔森岡移民の〕2航海で来られた人でなかなか人の世話をするその人が、われわれの所へ来て、おい君、ボリヴィアの山へ行かんか、北米の会社があるというその会社のゴム採りに行かんかと、まずゴム採りで、ゴムをよけいとればお前らのふところに皆入る。」との誘いがあったようだ。その後、「河村安武」なる人物の調整に預かったという。この河村という人物は、ペルー移民の主導者にして、その後、タンボパタ方面でゴム産業へ日本人労働者を導入しようとしていた田中貞吉の配下、「河村八十武」のことと推測され、下瀬は、この方面で活動していた明治殖民会社から就労先について「ゴム採りが好きか、あるいはチャッコといますかチャカラといますか、⁴そこへ行って働くのが好きか、あるいは道の修繕に行くのか好きか」と、仕事を斡旋され、道路修繕の方にいった、という。インタビューの中で明記されていないが、タンボパタ方面の米国会社インカゴム社（その2を参照）の道路工事に従事したようである。

「そして今度はタンボパタへ入って、わしらはまたゴム採りにやられました。」このゴム採集業務を先導してくれたのは滋賀県出身の中川庄兵衛なる人物で、そこでゴム採取業務をおこなった後に、ペルーのマルドナード経由でマドレ・デ・ディオス川を通ってリベラルタに来たという。リベラルタへ行く直前についても

興味深く語っている。

「〔マルドナードにいたとき、農業をやってそれを売りに出したところ〕何でも売れます。しかしだんだんとゴムの相場が下がって、景気が悪くなり米も売れ口が悪くなり、米をつんで私こっちへくだって来たんです。そして1914年にリベラルタへ来たわけです。」



写真2-3 下瀬甚吉が活躍した地域。川路賢一郎「アマゾン上流に日本人を訪ねて—ボリビア国ベニ州、パンド州紀行—」『移住研究』第19号、1982年掲載の地図を筆者が一部加工した。

下瀬甚吉がリベラルタへ入ったとき、同市の日本人社会の人口は増加しつつあり、日本人会創設間際でもあった。甚吉は、当初、仕立屋を目指したようで、リベラルタでは既に福島県人の仙石ヒロシという方が仕立屋をやっていて、それを見て、仕立屋になろう、と決意したという。甚吉は、4年程度仕立屋をしていたようだ。この度、リベラルタ在住で前号紹介したマリア・デル・ピラル・ガマラが、地元の「エルコメルシオ紙 (El Comercio)」の1917年の写しを送ってくれたのだが、同紙でリベラルタの職業が羅

列されている欄に「Sastrerías(仕立屋)」
「Shimose」と見える。

Club Alemán.	1.ª categoría.		
Anclaje de lanchas			
Suárez Hnos. Agen. Hlta.	«Campa».	1.ª cat.	50.—
"	"	1.ª y 2.ª tri.	25.—
"	"	2.ª cat.	25.—
"	"	1.ª y 2.ª tri.	25.—
"	"	«Illimani».	25.—
"	"	«Madidi»	25.—
"	"	«Herta»	25.—
"	"	«11 Octubre»	25.—
"	"	«Manuripi»	3.ª cat.
"	"	«Germania»	1.ª y 2.ª tri.
"	"	2.ª cat.	12.50
W. Mariaca y Cia.	«Maravillas».	1.ª y 2.ª tri.	25.—
Destilación de alcohol			
Suárez Hnos.	"Ivon".	2.ª cat.	100.—
"	"Florida" 3.ª	1.ª " "	50.—
Sastrerías			
Simizu	2.ª categoría.	1.ª y 2.ª tri.	12.50
Shimose	"	" "	12.50
Miyahuchi II	"	" "	12.50
Sengoco	"	" "	12.50
Miguel Ramfrez	3.ª	" "	6.25
Carpinterías			
Kasamache	2.ª categoría.	1.ª y 2.ª trimestre.	25.—
Kimura	3.ª	" "	12.50
Risas y juegos no prohibidos			
José Ojata	(6 meses)	1.ª y 2.ª trimestre	300.—
Nishimoto.	(2 meses)	julio y agosto	100.—
Comerciantes ambulantes			
Tanomo Monover.	3.ª categoría.	1.ª y 2.ª trim.	
Ingresos extraordinarios			
Marceliano Chávez G.	Instalación cantina en		
	diad patrios	1.ª cat.	75.—
Nakagawa	Id. id. id.	2.ª	50.—
J. Kitagawa	Id. id. id.	" "	50.—
Alquiler de terrenos			
Otake (Japonés)	Enpoca por alquiler	1 hect.	
	el año		15.—
Manuel Cadima	" " "	3 "	30.—
IMPUESTO de cobrambre			
ALQUILER del Mercado			
CARNEO de cerdos			

写真2-4 1917年El Comercio紙の一部「Simose」の名が見える。

その後、下瀬は、小売業に転じ、食料品を売ることになった。さらにこの時分リベラルタの日本人にとって新たなビジネスチャンスが生まれる。

「ブラジル〔グアヤラメルン〕からボリ
ヴィア〔リベラルタ〕へかけて鉄道が出
来るというので、リマにおる人で沖縄県
人の八木〔宣貞〕さんが、移民を入れる
仕事をしておった。鉄道を請負って、そ
の時期にはもう来ておりました。そのお
りからふえたんです。〔中略〕それから

だんだんと日本人が、ここで米を作ることとしました。」

八木については改めて取り上げるとして、下瀬が日本人の人口増加と共に、日本人にとって必須の食糧であった「米」を次のターゲットとしていたことが分かる。ところがこうした日本人の興隆も、ゴム景気が下火になると下り坂にならざるをえない。「日本人もだんだん仕事はなくなり、ここの木を切り開いて米やなんや作ったけれども、そこでおもに沖縄県の人が多かった。米がはけんもんじゃから沖縄県人の連中が、内地のしょうちゅうに、しょうじゃないか」ということで、米焼酎を作ったが、「ここのしょうちゅうはカーニャ（砂糖きび）からとるんで米からとったものとはにおいが違うから売れんのじゃ、それでおじゃんになった。」というようにうまくいかなかったようだ。

1915年2月15日に創設されたリベラルタ日本人会の創立総会には、既に下瀬甚吉は設立委員のひとりとして名前を連ねている。リベラルタ日本人社会の中で既に目立った存在だったのだろう。1917年5月の総会では、早くも副会長に選出されている。その頃、リベラルタの日本人社会は最盛期を迎えつつあったが、人口の増加は一方で、不品行な日本人の増加ももたらした。このため、下瀬と会長の中野音吉は日本人社会の道徳的向上にも心を砕いていた。議事録に言う。

「近来当市在住邦人間に不品行なる者のあり。是等の不品行者は会に正式に入会

せず、引いては日本人の不名誉なる行動を為し、在留邦人の面目を毀損し、当市に於ける在留邦人の社会的地位に悪影響を及ぼし居ることなれば、本会は未だ本会に入会せざる邦人は、総て入会を強制して入会せしめることに決議す。若し入会なき者に対しては邦人間の交際を絶交し、品行上に鑑み、不品行者出でたる場合は転住せしむることあるべし。」⁵

下瀬は、日本人エスニシティをうまくボリビアの社会に共存させようとしたのではないだろうか。例えば、1917年7月15日の地元紙エルコメルシオ紙では、リベラルタ市の慈善団体（コンサート等各種イベントを開催）に日本人会は「日本人コロニー（Colonia Japonesa）」として寄付を行い、その中に下瀬の名前も見える。このように日本人会として同一の歩調をとることによって、リベラルタ社会の中で、日本人の一体性を示し、ボリビア社会との融和性を高めようと下瀬のみならず日本人会の中核メンバーは考えていたのであろう。この日本人会での下瀬の活躍については次回以降も引き続き見ていきたい。

（つづく）

注

¹ ボリビア日系協会連合会、ボリビア日本人移住 100 周年移住史編纂委員会『日本人移住 100 周年誌 ボリビアに生きる』、2000 年
一方で、国本伊代氏は、次のような興味深い話を書き留めている。

「長男ペドロの生い立ちを私に語ってくれた物静かな母親は、若き日のペドロが父の下瀬甚吉氏に対して、なぜ自分に日本語を教えてくれなかったのか」と問い詰めたことがあったと言った。その時、私は別の一世の老人が話してくれ

たことを思い出した。幾人もの一世たちが、大きくなった子供たちから、同じ質問をされ辛い思いをしたという。日本がまだ世界の経済大国になる以前の話である。」（「リベラルタの日系社会—ボリヴィア日系人調査の旅から—」『海外移住』第429号、1984年

² 以下、下瀬甚吉のインタビューについては、日本人ボリヴィア移住史編纂委員会『日本人ボリヴィア移住史』、1970年から引用する。

³ 厳島丸は、森岡商会所有で元々は英国船 *Duke of Fire* である。移民会社所有の船は珍しく維持管理の問題で故障が頻発し、「いつつか丸」と揶揄されたという。山田廸生『船にみる日本人移民史』、中公新書、1998年

⁴ 因みにこのチャッコとは、chaco と書き、「ゴムのバラッカ〔ゴム集荷地点〕における小農地」を指し、チャカラとは通常 chacarismo と記載し、「chaco の耕作」のことを指す。

⁵ 以下引用するリベラルタ日本人会の議事録は、ボリビア在住の佐藤信壽氏より同氏が転写されたものをご好意でいただいた。また、同氏には、マルタ・シゲクニ氏所蔵の貴重な下瀬甚吉氏の写真の写しも送付いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

3. 第14回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム

一般社団法人日本ボリビア協会副会長

特定非営利活動法人

日本-ボリビア医療友好協会 理事長

国際医療福祉大学

市川病院消化器内科 教授

森下鉄夫

1. はじめに

ボリビアでは一昨年2019年10月から延期されていた大統領と上下両院の国会議員選挙が、昨年2020年10月18日に約1年振りに実施され、社会主義運動党（MAS: Movimiento el Socialismo）の候補者ルイス・アルベルト・アルセ・カタコラ氏（Sr. Luis Alberto Arce Catacora）が新大統領に選出されました。

第14回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム（XIV Simposio Internacional

Boliviano-Japones de Medicina y Gastroenterologia）が、一昨年2019年10月24日～25日にボリビアのサンタ・クルス・デ・ラ・シエラ市（サンタクルス）でボリビアキリスト教大学Universidad Cristiana de Bolivia（UCEBOL）と共同で開催されました。

1年半近く前のことになりますが、その内容と経過を皆さまへ報告させていただきます。

2. 大統領・国会議員選挙をめぐる混乱の中、ボリビアに到着

ボリビアではシンポジウムの直前2019年10月20日に大統領・国会議員の選挙が行われました。投票日の前後から投開票・集計手続きに対する不信感などを契機としてファン・エボ・モラレス・アイマ大統領（当時）（Sr. Juan Evo Morales

Aima)が率いる与党MAS支持派と、反対派の間で死者がでる抗議活動や衝突が起き、反政府派により人の移動・物流を止める道路封鎖が各地で行われるなど、ボリビア国内は混乱状態にありました。

12名の日本人医師がシンポジウムに参加を予定しましたが、1名はボリビア行きを日本で断念され、2名は到着したサンタクルスのビルビル国際空港から直接日本へ引き返さざるを得ませんでした。他の4名はこの混乱以前にボリビアへ無事入国していました。私ども5名は10月23日にペルーのリマからサンタクルスに入国する予定でしたが、この混乱のため搭乗予定の飛行機が欠航となり、ペルーのリマに1泊し、翌日の早朝5時5分にビルビル国際空港に到着しました。



写真3-1 空港からようやくホテルに到着できた私たちと事務局長のDr. Sayuri Igarashi（中央）。右が空港から乗ってきた救急車

空港には本シンポジウムの事務局長のDr. Sayuri Igarashi（五十嵐さゆり先生）が出迎えてくださり、UCEBOLが用意した救急車が待機していてくれました。道路封鎖のため尋常な方法ではホテルにたどり着けないため、脳外科医師が

運転してくださる救急車が日本人救急患者をUCEBOL病院へ送るという設定で宿泊ホテルに向かいました。心配そうな素振りを演じる付き添い役の4名とともに、私が救急患者役をして車内に横たわりました。途中、サンタクルス地域を支配し道路を封鎖していた反政府派が設置した複数の検問所で検問員が車内をチェックする時は日本へ引き返さざるをえない事態になることを恐れ、緊張しましたがなんとかホテルにたどり着きました。

（写真3-1）

宿泊ホテルは当初予定されていたHotel Costa del SolからUCEBOLキャンパスに車で5分ほどのHotel Terranovaに変更されました。

3. 混乱の中、無事シンポジウム開催

シンポジウムはUCEBOL構内の講堂で行われ、私ども一行は2日間とも検問が一時的に緩やかになる早朝を狙ってUCEBOLが用意したバスに乗り、会場に向かいました。途中前の晩の検問所の焼き火跡が各所に見られました。

シンポジウムのスケジュールや会場は一部変更され、日本人医師9名（写真3-2）に加え、コロンビア・チリの医師2名も参加され、講演は25日午前と午後集約して行われ、出席できなかった日本人医師3名の講演も代読されました。講演は各60分英語で行われ、スペイン語に逐次通訳され、ディスカッションも活発



写真3-2 参加した日本人医師

に行われました。長時間にわたるシンポジウムでしたが、通訳は米国からUCEBOLに留学している医学生の方のSrta Ivania Sarai Cruzが務めてくださいました。ボリビアは米国に比して、学費が安く、いずれ米国の医師免許を取得する由でした。

道路封鎖のため会場へ自転車か徒歩でしか辿り着けない状況のなか、医師・医学生124名の方々が講演を聞きに来てくださいました。（写真3-3）



写真3-3 道路封鎖などの混乱の中参加して下さったシンポジウムの出席者

4. 答礼パーティ

24日に日本側による答礼パーティが行われました。いつもの答礼パーティと異なりホテルの食堂で小規模に簡素に行われ

ましたが、UCEBOL学長、シンポジウム役員、前述のコロンビアやチリの医師も交え和気藹々と懇親を深めることができました（写真3-4）。残念ながら今回は恒例の日本人女性医師による茶道のお手前披露やボリビア人女性への浴衣の着付けはできませんでした。

また、サンタクルス在住の日系医療関係者の方々との懇親会が予定され楽しみにしていましたが、これも中止せざるをえませんでした。

なお、Dr.Jorge Kazuo Inoue（井上和夫先生）にはシンポジウム開催にあたり終始お世話になりました。あらためて御礼申し上げます。



写真3-4 日本側主催による答礼パーティ

5. 国際友好のもとに医療シンポジウムの発展を願って

帰途は10月27日早朝4時44分発の飛行機でサンタクルスを出発しました。ホテルから空港へは空港タクシーを予約・確保し（料金は通常の4倍でした）、複数の検問所をEチケットを見せながら突破しました。

今回のシンポジウムは、ボリビア側会長をUCEBOL学長のDr.Soo Hyun Chung、事務局長を前述のDr.Sayuri Igarashiが務められ、日本側会長は森下が務めました。

日本から慶應義塾大学、千葉大学、東邦大学、獨協医科大学、福島県立医科大学、長崎大学、国際医療福祉大学より12名の先生方が参加・講演をされました。講演は消化管微小循環、シャーガス病、消化管感染症、高地消化器疾患、消化管異物内視鏡除去治療、大腸出血治療、ヘリコバクターピロリ菌除菌治療、医療コンピュータの活用、日本における女性医師の活動など基礎・臨床・社会医学と多岐に渡りました。

特に小腸バルーン内視鏡・カプセル内視鏡などの最新の消化管内視鏡診断・治療も紹介され、聴衆に感銘を与え大変充実したハイレベルな学術集会となりました。また、胃がん・ヘリコバクターピロリ菌感染症の内視鏡診断・治療について若手医師へのクイズ形式による教育セッションも設けられました。

シンポジウムには前述のごとく124名のボリビア人医師・医学生が出席されました。第1回（1962年）から第14回シンポジウムまで延べ214名の日本人医師、1名の日本人看護師、4,586名のボリビア人医師・医学生、297名の他国の医師、24名のボリビア人看護師と、合計5,122名の関係者が参加されたことになります。

私たちは打ち解けた雰囲気のもとに国際友好を楽しみながら、当シンポジウム

を、消化器のみならず基礎・臨床医学の各領域、さらには看護領域やコメディカル領域も含めた学際的学術集会、および若手医療者の教育集会へ発展させることを目指しています。

既に消化器病学に加え、微小循環学、微生物学、感染症学、熱帯医学・寄生虫学、医化学、小児科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、呼吸器科、腫瘍学、総合医学、予防医学、歯科・口腔外科、看護学、医療系コンピュータテクノロジー領域の先生方が御講演くださっています。

このシンポジウムが医学・医療を通して日本とボリビアおよび南米との友好・親善・協力に、少しでもお役に立てばと願っています。

参考文献

- 1) 森下鉄夫:日本・ボリビア医療友好協会 . W'Waves、 9:26-27,2003
- 2) Morishita T. : Non profit organization Japan-Bolivia association for medicine and friendship. W'Waves、 14:102-103,2008
- 3) 森下鉄夫:第 9 回日本 - ボリビア消化器国際シンポジウムと第 30 回パンアメリカン消化器病学会特別シンポジウム. W'Waves、 13:24-25,2007
- 4) 森下鉄夫:第 10 回記念日本 - ボリビア消化器国際シンポジウム. W'Waves、 17:34-35,2011
- 5) 森下鉄夫:第 11 回日本 - ボリビア国際消化器シンポジウム. W'Waves、 19:51-52、 2013
- 6) 森下鉄夫:第 12 回日本 - ボリビア国際医学・消化器シンポジウム. W'Waves、

22:21-22,2016.

7) 森下鉄夫:第 13 回日本 - ボリビア国際医学・消化器シンポジウム, WWaves、25:28-30,2019

特定非営利活動法人 日本-ボリビア医療
友好協会ホームページ

<http://www.nippon-bolivia-iryo-yuuko.jp>

(終わり)

4. コロナ禍における国際協力・ JICA事業の新たな取組みについて

JICAボリビア事務所長
小原 学

昨年 2020 年は、ボリビアにおける日本の国際協力開始 60 周年という記念の年であった。1960 年に研修員受入事業から始まった日本政府のボリビアに対する国際協力事業は、この 60 年の間に、専門家派遣 1,500 名、研修員受入 6,000 名、青年海外協力隊派遣 1,200 名、資金協力(有償・無償)約 2,000 億円などの実績を積み重ねてきた。日本とボリビア両国関係者の多大な努力により、ボリビアの経済社会開発と両国の友好関係の構築・強化に貢献し、現在でもサンタクルス・ビルビル空港、日本病院、消化器疾患センター、地方地下水開発、小学校教育、日系社会連携事業など、ハード・ソフトの両面で、重要な「成果(アセット)」が存在する。

2020 年当初においては、地熱開発事業、

オキナワ道路整備計画などの資金協力、看護人材育成や水資源管理、灌漑などの技術協力を実施しており、約 40 名のボランティアが活動していた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により、JICA は 2020 年 3 月、専門家やボランティアの帰国を決定。加えて、資金協力事業や技術協力プロジェクトも停滞・停止した。

日本の援助アプローチの中で特に技術協力の特徴は「現場で人と人との信頼関係を築いていく」ことにあると言われる。人の往来が基本となる援助形態であり、直接的な体験を通じて技術や考え方を伝承する現場主義を志向している。その主役が、専門家やボランティア、そして研修員である。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大により人の移動が制限されたことから、日本の国際協力の手法についても、否応なく変化が求められた。

こうした状況で 2020 年から試行錯誤しながら進めてきたのが、次の 3 つのアプローチである。

- (1) ボリビア国内の人材・リソース・ネットワークとの連携
- (2) 過去の成果(アセット)の再評価と活用
- (3) 遠隔による事業実施・現場のリモート化

これらのアプローチを効果的に組み合わせながら、既存事業の継続に加え、新規事業をパイロット的に開始した。具体的な事例として、以下に、いくつか紹介したい。

1. 「ナショナル・ボランティア」プロジェクト（ボリビア国内の人材でボランティア活動を実践）

JICA のボランティア事業は、「日本の若者・シニア」が現地の市民と一緒に生活しながら草の根レベルで活動する事業である。ボリビアにおいては40年以上の歴史を持ち、1,200名以上が派遣され、現場に根付いている成果も多い。

コロナ禍で全隊員が日本へ一時帰国している中、新たなボランティア事業として試行的に開始したのが、「ボリビア国内の青年」がボランティアとして活動する「ナショナル・ボランティア」プロジェクトである。JICA ボランティア事業の主な目的（経済・社会への貢献、友好関係の促進、ボランティア事業を通じた人材育成）は維持しつつ、ボリビア人ボランティアによる強み（現地ネットワーク、コミュニケーション、機動性等）を活かした事業実施を目指している。

2021年1月からボリビア日系協会連合会及びNGO 団体 DIFAR で4名の「ナショナル・ボランティア」が活動を開始した。彼らの職種と活動内容は次の通りである。

- (1) 日本語教育（ボリビア日本語研究会の活動支援）；ボリビア日系協会連合会配属
- (2) 青少年活動（日系人若手グループ ANIMO の活動支援）；ボリビア日系協会連合会配属
- (3) コミュニティ開発（ボリビア国内向けの日本文化紹介）；ボリビア日系

協会連合会配属

- (4) 廃棄物処理（コンポスト技術普及）；NGO 団体 DIFAR 配属

ナショナル・ボランティアの一人、サンファン移住地出身のミヤマエ・セカイさん（青少年活動）は「最初、JICA ボランティアとして、どう活動したら良いか戸惑いもあったが、JICA ボリビアスタッフや連合会の方々のサポートを受け、ようやく軌道に乗ってきた。ボリビアに日本文化の面白さ・奥深さを発信していきたい。」と意気込みを語る。

この事業を通じて、ボリビア若手人材の活躍と、ボランティア事業を通じた各人の成長を期待している。そして日本からのボランティアがボリビアに戻ってきた際には、両国のボランティアが協働・補完しながら活動するという新たな事業へと進化してもらえることを望んでいる。



写真4ー1 4名のナショナル・ボランティア（左からミヤマエ・セカイさん、ロメロ・エリアさん、ウキイケ・ワルテルさん、ワタナベ・サキさん）

2. 日本病院を中心としたバイオセキュリティ研修(適切なコロナ対策のための人材育成)

サンタクルスにある日本病院は 1983 年に日本の協力により建設され、その後、技術協力を通して多くの人材を育成してきた。2001 年にはボリビアで最優秀病院としてボリビア政府から認定され、今回の新型コロナウイルス対応において中核病院として機能している等、ボリビアにおける JICA 事業の代表的な「成果 (アセット)」の一つである。

2020 年 9 月から 2021 年 2 月にかけて、この日本病院を中心に、過去に実施した技術協力事業のフォローアップという位置づけで、サンタクルス県、ベニ県、パンド県の医療従事者に対して「バイオセキュリティ研修」を実施した。コロナ禍において、感染症対策と医療廃棄物処理の正しい知識と技術を身につけたファシリテーターを 18 名育成し、その後、彼らが地元の医療機関において普及する方法を取った。合計で 1,500 人以上の医療関係者に研修を実施した。

この一連の研修では日本が育成した人材が活躍した。その一人がヴラディミール・ティコナ医師である。ティコナ医師は JICA の保健医療プログラム FORSA において 10 年以上の経験を有し、日本での研修も受けた、JICA と日本を熟知した優秀な人材である。いわば日本の協力の「人的アセット」と言える。

また、今回は HP メディカル (ボリビアの医療機器販売会社) や国際企業の 3M

社といった新たなパートナーの支援も得て、協力の枠組みを広げた。この研修の成果として、「バイオセキュリティガイド」が作成され、3 県で公式に承認された。今後、医療従事者に配布され、感染予防体制の向上に役立てられる。

2021 年 2 月、ボリビアでの初のワクチン接種が、日本病院にてルイス・アルセ大統領同席の下、開始された。感染症対策のみならず、母子保健、救急医療等、日本病院はボリビアにおいて依然としてトップ・レファラル病院であり、ボリビア国民にも日本の協力として広く認識されている。こうした我が国の成果を、今後とも「日本水準の技術・人材」を維持しながら、いかに効果的に活用していくかが重要になる。



写真 4-2 バイオセキュリティ研修の受講者達

3. 日系高齢者遠隔・オンラインケア事業「あんしんネットワーク」(日系人医療従事者がコロナ禍の日系社会に安心・安全な生活を提供)

オキナワ移住地及びサンファン移住地

のあるサンタクルス県はボリビア国内で最も新型コロナ感染者が多く、移住地内でも多くの感染者が確認されている。サンタクルス市、サンファン、オキナワの各移住地の日系診療所においては、外出禁止令が出ていた間は原則閉鎖しており、緊急対応のみで、十分な診療や往診などが行えていない状況にあった。特に高齢者は、体調を崩していても病院や薬局に出かけることもできず、移住地生活についての楽しみである行事やデイサービスの再開の目途も立たず、不安とストレスを抱えて生活している。そこで、日系社会に安心・安全な生活を提供したいという思いから、日系医療チームによる日系人のための遠隔・オンライン診療や高齢者ケア・巡回診療サービスが2020年12月から始まった。サンタクルス中央日本人会診療所の所長であるイノウエ・カズオ医師をリーダーに複数の医師や理学療法士など、日本で研修を受けたJICA 帰国研修員が成果を還元すべくこのプロジェクトに携わる。

本事業リーダーであるイノウエ医師は「チームで力を合わせて頑張らないといけない。自分は若手をサポートしつつ、プロジェクトが上手くいかないときはアドバイスしていきたい。日系社会のニーズを把握しながら皆さんに喜んでいただけるサービスを提供していきたい。」と抱負を語る。

JICA はこのプロジェクトに2年間の予定で助成金事業を通じて支援している。今後、全ての日系人に裨益し自立発展可

能な事業となることを目指している。



写真 4-3 Zoom でオキナワ移住地の高齢者の方々に支援する八田生香さん

信頼関係がベース、コロナ禍でも現場からの学びを継続

上記で紹介した3つのアプローチの他にも、現地 NGO 等を活用した「ラパス・ウユニの観光プロジェクト」や「女性の職業訓練・零細企業支援」、本邦企業 19 社とともに参加した「輸出・ロジスティック・投資に係る国際バーチャル・フェア」など、この1年間、小規模ではあるものの、柔軟かつ可能な限り迅速に試行・チャレンジを繰り返してきた。

これらの一連の活動から学んだこととして、「長年積み重ねてきた信頼がベース」と「その場その場で動く現場志向」が挙げられる。これらは特段目新しいことではないが、コロナ禍における制約のある環境においても、現場における試行錯誤と、そこから生み出される価値・共通認識や人間としての信頼性が重要であり、これが無ければイノベーションを引き起こすこともできないことを再認識した。



写真 4-4 ラパス県ピアチャ市での農民への資機材引き渡し式（高地平原でも事業推進とコロナ対策を両立）

JICA ボリビア事務所では「Forjando Lazos de Amistad y Confianza」（友情と信頼の絆を強化しよう）をスローガンとして掲げている。これまでの60年で蓄積されてきた信頼をベースに、これからも、その絆を更に強化し、そして新しい取り組みにチャレンジしていきたい。

（ボリビアにおける JICA 事業へのご提案や参画を希望される個人・団体様がいらっしゃれば、是非、ボリビア事務所へご連絡ください！一緒に事業を考えていきましょう！）

JICA ボリビアにおける取り組み

<https://www.jica.go.jp/bolivia/index.htm>

1

JICA ボリビア事務所 Facebook

<https://www.facebook.com/JICABolivia/>

（終わり）

5. ボリビアの近況（新型コロナウイルス 他）

一般社団法人日本ボリビア協会

専務理事 杉浦 篤

2020 年 12 月 20 日～2021 年 3 月 17 日

1. 新型コロナウイルス関係

※感染は 9 月下旬から 12 月上旬の間は、300～600 人/日に減少したが、1 月上旬から第 2 波に突入、下旬には一時 2400～2600 人/日に急増、その後減少して 3 月中旬現在 700～1000 人/日の水準。3 月 17 現在累計で感染者 261 千人、死者 12 千人。

※ワクチンは米ファイザー、英アストラゼネカ、露スプートニク Vなどを政府が調達して 1 月末より医療従事者から摂取開始。9 月末までに全国民完了が目標。

※一方、第 3 波の拡大防止策としてアルセ政権が、外国人医師導入と医療業界のスト禁止を目指して 2 月 12 日に公布した緊急衛生法が、医療業界の激しい反発を招き、現在も全国で断続的にストライキが頻発。

※2 月のオルロ・カルナバルもパレードは中止。デジタルオンラインに変更。

2. 内政・経済

※MAS 党は昨年 10 月 18 日の大統領選挙で勝利後 11 月 17 日に全国党大会を開き、亡命先から帰国した前大統領のエボ・モラレス氏を党首に選出。3 月 7 日の統一地方選挙で 9 県中 7 県知事、339

地方自治体中 300 の首長獲得という高い目標を設定。

※投票の結果、ラパス、コチャバンバ、エル・アルト、サンタクルスなど主要市長選で MAS 候補は野党候補に敗北し、県知事選では、コチャバンバ、オルロ、ポトシなどで勝利したが、想定外の結果を受けて MAS 内部は現在分裂・混乱状態。

※その背景には、新型コロナによる経済の低迷（2020 年の GDP は前年比約▲10%）のなかで、アルセ新政権は 12 月 26 日に国民の助け合いを要請し 2 月 14 日には緊急事態宣言を見送ったが、その後打出した政策が迫力を欠いたことに加えて、2 月 12 日公布の緊急衛生法が社会混乱を招来、大豆価格統制への農業界の反発。2019 年 10 月の大統領選挙不正による被拘束者（主に MAS 党関係者）大幅釈放へ国民の反発など、いくつかの理由が挙げられるが、根本的には、国政選挙と地方選挙を同じ戦略で臨んだためという分析結果もある。

※さらに、3 月 13 日には現司法当局が、2019 年 10 月 20 日の投票集計不正を契機に当時のエボ・モラレス大統領が失脚した事件をクーデター見做して、前アニエス大統領と閣僚 5 人をその首謀者として逮捕し収監する事態が発生。

※これに対して昨年 11 月の大統領選挙で次点だったカルロス・メサ候補やホル

ヘ・キログ元大統領、スクレの裁判所判事などが法の正義の逸脱、司法の独立侵害として激しく非難し、ラパスやオルロでは MAS 党自体による抗議デモ、エボ・モラレス党首の地元オルロではゼネストなどが発生したほか、米国国務省高官、米州機構のルイス・アルマグロ事務総長、ブラジルのボアソナーロ大統領などからも強い非難を惹起。

※経済面では 11 月 15 日には経済財政相が経済回復まで国際的債権者及国際機関への債務返済停止発表する一方で、2 月 18 日には政治的理由から IMF 借款 3.5 億 \$ を返済。12 月 18 日の為替レート切上げ（1 \$ 6.96Bs→6.86bs）はインフレ対策と輸出奨励との相克を招き、外貨準備は、2020 年 11 月 13 日現在 51.52 億 \$ と 2019 年末 64.68 億 \$ から 20%減少。

※新型コロナによる失業は、男性 11%、女性 44%、観光業の休業は 50%と高水準。
※頼みの綱の伯/亜向け天然ガス輸出は相手事情で伸び悩むが、一方、チュキサカ県で現在の推定埋蔵量の 11%に当る天然ガス田発見の報道あり。

※経済の低迷もあって、チリとの間で密輸が著増し警察が監視強化。

3. 外交

※11月8日のアルセ大統領就任式には、アルゼンチンのフェルナンデス大統領、イランのザリーフ外相、ベネズエラ（マ

ドゥロ政権)のアレアサ外相が出席したほか、メキシコ、キューバ、ロシア、中国、パレスチナなど世界の主な左派国が祝意を表明。一方、米国のポンペオ国務長官も祝意を表明。

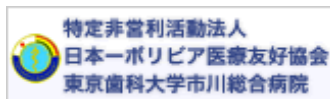
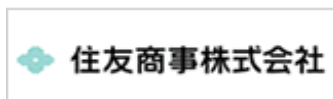
※同盟関係では、米州ボリバル同盟(ALBA)とLA/カリブ諸国共同体(CELAC)南米諸国連合(UNASUR)へ再加盟。

以上

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2021

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)